

# 「メタファーと認知」

—Cognition through Metaphor—

兼 沢 純 子

## 1. 概念としてのメタファー

メタファーは、言葉のあやという表現からも見受けられるように、伝統的に言語表現にかかわるものとして、レトリックの中に位置するものと考えられてきた。従来のメタファー観として、メタファーは字義通りの表現で言い換えることができ、字義通りの表現の逸脱したものとする見方と、メタファーには特別な認知的内容はなく、感情的な効果を持つとする見方があった。後者の中でも、デヴィッドソン (1979) は、特別なメタファー的な意味といったものはなく、メタファーは字義通りの意味以上のものを意味するのではなく、メタファーをメタファーたらしめているのは、その意味ではなく、その使い方であるとする点で独自の主張をしているが、字義通りの表現の優位性とメタファーの周辺性を主張している点においては、前者と共通するところがある。しかし、メタファーは周辺的なものではなく、字義通りの表現と同様に、あるいは、時には字義通りの表現ではとらえきれないものをとらえるという機能を持つと主張する、認知という視点からメタファーを考える研究が近年なされるようになった。その中でも、レイコフ&ジョンソン (1980) は、言語表現にあらわれるメタファーだけではなく、われわれの存在の基底にあるメタファー構造とでも言うべきものが、認知活動そのものに大きくかかわり、われわれが世界をとらえる有効な手段となると主張している。彼らの言うメタファーは言語表現にあらわれるメタファーではない。言語表現そのものの基盤に存在する概念体系を

形作るものである。これらのメタファーは、慣習的な、とりわけ身体的な経験に根ざしていて、ゲシュタルト的な構造をなしている。われわれが、ものを考えたり行動したりする際に基づいている概念体系の本質は、基本的にこのメタファーによって成り立っているとしている。

たとえばそういった概念メタファーの中には、ARGUMENT IS WAR (議論は戦いである) というものがあり、そのメタファーが言語表現に反映される。

(1) Your claims are indefensible.

(2) I've never won an argument with him.

この概念メタファーは、言語のみならず、思考や行動にいたるまで、日常の営みにわれわれが意識しないほど深く浸透していて、知覚や思考や行動の仕組みに構造を与えている。彼らの主張によると、メタファーの本質は、ある概念を他の概念を通して理解し、経験することである。Lakoff & Turner (1989) の表現を借りれば、われわれの概念は、他の概念により、比喩的に理解される。 (“anything can be understood metaphorically in terms of anything else, or all of our concepts are understood metaphorically in terms of concepts from different domains”) ここで、異なる概念領域間の写像(mapping)が行われている。言語表現自体がメタファーなのではなく、その表現の基盤にある概念的写像がメタファーなのである。人間の概念体系がメタファーによって構造を与えられ、規定されているからこそ、言語表現としてのメ

タフナーも可能になる。

概念としてのメタファーも言語表現としてのメタファーもモデルとにている。一般にまだ十分に理解されていない概念を、よりよく理解させるために、より知られている共通的な概念を用いて説明するというプロセスは、モデルと概念メタファーに共通する。例えば、分子構造を説明するために、モデル（模型）を用いるように、メタファー表現を通して、新しい、あるいは異質の概念を理解させることができる。言語表現としてのメタファーも同様である。その場合は、字義どうりの表現が表わす同じ概念をメタファー表現で言い換えるという意味で同質異形モデルになる<sup>1</sup>。ただし、メタファー表現は字義どうりの表現の単なる言い換えではなく、それ以上のものがつけくわえられていることに留意しなければならない。それは、後に述べるが、メタファーの特質のひとつであるイメージを喚起する力である。このイメージは、われわれの経験に基づく概念メタファーをもとにして産み出される。

佐伯（1986）はモデルと現実世界との関係を以下のよりに述べている。

モデルというのは、現実世界を別の世界で「見立てた」ものである。モデルによる見立てが行われるとき、現実世界のある側面はそぎ落とされる。見立てられるモデルの世界は、認識者にとっては、「様子がわかった」世界である。そこにはどういうものが含まれ、どういうことができ、どんなことが起きるかについて、予測できるはずの世界である。

ここに見られるのは「見立て」という行為である。「様子がわかった世界」で「様子がわからない世界」を見立てて理解させようとする行為である。「見立て」という行為には、必ず見立てる人がいる。その見立てる人によって、モデルが提示される時には、ある側面が選ばれ、別の側面がそぎ落とされていく。レイコフ&ジョンソンも概念メタファーが、ある面を際立たせ、ある面を隠すという点を強調している。

(3) He attacked every weak point in my argument.

これは、ARGUMENT IS WAR（議論は戦いである）という概念メタファーがもととなった表現だが、この話し手は、議論は戦いであるという概念メタファーを採用することで、議論の持つ協調的側面をそぎ落としてしまっている。

## 2. 言語表現としてのメタファー

従来メタファーとして論じられてきたのは、主に言語表現にあらわれるメタファーのことであった。しかし、前述したように、概念メタファーというものが存在し、それが言語表現の基盤となっているとすれば、言語表現のメタファーに対する見方も当然変る。その立場をとれば、言語表現のメタファーは単なる装飾などではなく、われわれの思考そのものから形作られ、思考そのものを形作っている概念メタファーが、明示的な形をとったものとなる。

(1)' Your claims are indefensible.

(2)' I've never won an argument with him.

(1)' , (2)' あるいは (3) のような言語表現は ARGUMENT IS WAR という概念メタファーが言語表現に反映した例だが、

(4) Argument is war.

(4) は言語表現としてのメタファー、隠喩である。ここでは概念メタファーが明示的に言語表現にあらわれている。

(1)' , (2)' あるいは (3) は、隠喩や直喩ほどではないとしても、まったく純粹に字義通りの表現ではなく、メタファー表現といってよい。比喩性ということに関していえば、言語表現は、純粹に字義通りの表現を一方の極として、もう一方の極に直喩や隠喩のようなメタファ

一性の高い比喩表現が置かれ、概念メタファーが反映された(1)’, (2) ‘あるいは(3)のようなメタファー表現がその間に位置する、連続体をなしているといえる。比喩表現の間でも、死喩のように、字義通りの表現に近いものから、詩などに見られる、独創的で創造的な比喩性の高い比喩にいたるまで、連続体をなしていると考えられる。

(5) This capsule is hard to swallow.

(6) I just can't swallow that claim<sup>2</sup>.

(5) は字義通りの表現であるが、(6) は概念メタファーが反映されたメタファー表現である。言語表現のメタファーの意味は、ある言語表現を他の言語表現で言い換えて得られるのではなく、その言語表現の背後にある、概念メタファーからなる概念体系の中の写像を認知することによって得られる。このメタファーによる認知は、特に、抽象的な領域の概念化に欠かすことができない。

言語表現としてのメタファーと、レイコフらが提唱している概念体系のメタファーとを区別しなければならない。以下の議論では、特に断りがなければ、メタファーという語は、言語表現にあらわれる比喩表現という意味で使用される。この場合、隠喩、直喩などの強い比喩表現と、概念メタファーの反映した弱い比喩表現も含めた、広い意味での比喩表現をさす。

「…のようだ」という直喩は、モデルを用いて、物理的には見えないものを「見立て」によって理解させるように、意識的に「見立て」により、よく知られている概念を用いて、知られていない概念を理解させる。あるいは、すでに知られている概念を、新しい視点から提示する。

隠喩や直喩は二つのものごとの類似性にもとづく表現であるという主張がなされているが、あるものが別のものに似ているということを行うためには特定の視点が必要である。なんらかの視点なしに類似はありえない。その視点とは、話し手の視点である。話し手が、隠喩や直喩を通して、その類似に着目させる。レイコフ流に言えば、言語表現を通して、概念の写像を認識させる。隠喩や直喩の価値は類似そのものにあるのではない。類似を

見出す視点の提示にある。メタファーに見いだされる類似関係はかならずしも本質的で客観的な特性値の類似性によるのではなく、話し手がそこに認知するものである。メタファーによって人は新しい視点、新しい世界観を獲得し、新しく世界を認識する。類似がメタファーを生み出すのではなく、メタファーが類似を生み出すのである。

### 3. メタファー表現の分析

メタファーは詩的表現だけではなく、どのようなテクストにおいてもあらわれる。われわれの思考に、レイコフ&ジョンソンが主張するように、概念メタファーが意識されないほど深く浸透しているのであれば、これは当然のことといえる。

以下では、日常の言語表現にあらわれるメタファーをとりあげて、そのメタファーを通して、どのような視点から世界が認知されているかを分析し、そのメタファー表現の下には、どのような概念メタファーのスキーマがあるかを検証する。

最初にコラムニストの Robert Fullugum (1986) から、彼の家の裏庭のかえでの木が秋になると紅葉し、やがて落葉するさまをメタファーを駆使して描写しているところをとりあげる。

(7) Across the back of our house is a row of middle-aged matronly maple trees, extravagantly dressed in season in a million leaf-sequins. And in season, the sequins detach. Not much wind in our sheltered yard, so the leaves lie the ladies' feet now like dressing gowns they've stepped out of in preparation for the bath of winter.

かえでの木々をふくよかな中年の女性に喩え、その葉が紅葉し、やがて散り、かえでの木々の根本にたまる光景をスパンコール、ドレッシングガウン、風呂などのメタファーを使用して描写している。冬が近づいて、かえでの木の根本にたまったかえでの落ち葉を、女性が入浴

するために脱ぎ捨てたドレッシングガウンに喩えている。冬が近づくと、紅葉したかえでの葉が落ちて根本にたまるという字義どおりの表現が表す以上のものがここにはある。イメージが喚起されるのだ。かえでに対する中年のふくよかな女性のイメージ、スパンコールの華やかなイメージ、そのスパンコールが華やかに舞い落ちるイメージを喚起する。冬の風呂という表現から、落葉すること（はだかになること）に対する肯定のイメージ（風呂に入るためにはドレッシングガウンを脱ぎ捨てなければならぬ。冬を迎えるためには落葉が必要である。裸の木も女性の裸が美しいように、美しい、など）を喚起する。このメタファーを使用したときに、かならずしも作者がすべてこれらのイメージを読者に喚起させることを意図していたわけではないかもしれない。読者が、作者の提示したメタファーからイメージを喚起するのである。したがって、作者の意図以上のものが産み出される可能性は常に存在する。このイメージの喚起の為には、言い換えれば、メタファーが成立するためには、作者と読者の間で共通の知識、文化的背景などが必要となる。この例に即して言えば、スパンコール、ドレッシングガウンとはどのようなものかという知識、入浴の時には裸になるなどの習慣などを共通理解として持っていなければ、このメタファーは十全にメタファーとして機能しない。逆にそういう条件がそろえば、文字どおりの表現では得られない豊かなイメージが得られ、そのメタファーゆえに表現は豊かになり、メタファーを使わなければ得られなかった理解が得られる。知っているものに見立てることで、よりよく理解させるというメタファーの働きがまっとうされる。

次に Charles M. Schulz (1981) のコミックから、自分の容姿に自信がないペパーミント・パティが友人のマーシーにむかって、自分が醜い雑草にすぎないと語る場面をとりあげる。

(8) The world is filled with beautiful plants and flowers, but I'm just an ugly weed. I'm a poor ugly weed trying to push her way up through the sidewalk of life.

マーシーはこれに対して、次のように応じる。

(9) That's a great metaphor, sir. Did you know that weeds have a wide tolerance for environmental conditions and the rare ability to exploit recently disturbed terrain? You can roll with the punches.

これを聞いて、パティは自信を取り戻す。

雑草が持つ性質すべてがこのメタファーが機能するのに必要というわけではない。その性質の中で、その言語共同体において一般に了解されているものだけで十分である。話し手と聞き手の間で、まったく同じイメージが喚起されている必要もない。上記の例では、パティは雑草の持つ否定的イメージを喚起させる使い方を行っているが、一方マーシーはパティの意図と異なったイメージを喚起し、逆に違った観点から現実を見させるということを行っている。メタファーの持つ現実描写、現実理解の力がこのエピソードに示されている。メタファーが持つ曖昧性が効果的に働いて、字義どおりの表現では得られないものを与えることができる。

詩的メタファーの場合は、詩人が通常は結び付かないものを結び付けることで新しいメタファーを創りだす<sup>3</sup>。ダンが、A Valediction-Of Weeping<sup>4</sup>の中で、涙の粒をコインに、丸い涙を地球儀に、女性を月に喩えたように、詩人は今まで認知されていなかった新しい類似関係を認知し、それによって既存の表現では得られない新しい理解をもたらし、本来は客観的な類似関係がないと思われていたところに新しい類似を見出し、提示することで、豊かなイメージを喚起させる。

前述したように、字義どおりの表現とメタファー表現は連続体をなし、メタファー表現の内部でも、その比喩性にしたがって連続体が形成されている。普通は結び付かないと思われているものを結び付けて作り出される創造的なメタファーも、やがては最初の衝撃を失い、固定化されていき、固定したメタファーは非メタファー表現（死んだメタファー、メタファーから派生したイディオム）へと移行していく。メタファーはメタファーとして

認知されたときからメタファーの持つ、新しく世界を切り取る力を失っていく。

## 4. メタファーと文脈

聖書にみられるメタファーとして、乳と蜜の流れる国（申命記 6:3）という表現がある。豊かな国をあらわすメタファーだが、このメタファーは固有の文化的背景に大きく左右され、すべての民族にとってこのメタファーがメタファーとして十全に機能しているわけではない。文化的背景が異なれば、発生するメタファーも当然異なる。また、同じメタファー表現に対する解釈が異なる場合もある。メタファーは（少なくともその発生においては）普遍的なものではない。言語表現のもとになる概念メタファーが民族、文化などにより異なることが、その一因となる。メタファーが世界を説明する力を十分に発揮できるのは、そのメタファーが持つイメージを喚起できる状況においてである。メタファーのイメージ喚起力を十分に発揮させるには、その言語の共同体の持つ文脈が重要な鍵を握る。

メタファーが、字義どおりの表現以上に、表現すべきものを理解させるためのものとすれば、メタファーがその目的を十分に果たしえないのは、メタファー表現の基盤となる概念メタファーが認知されないか、そのメタファーを理解するための共通の背景となる文脈が欠けているからだ。たとえば美しい黒髪のことを言うのに、からすの濡れ羽というメタファーを使うが、この表現がメタファーとして十全に機能するためには、からすの濡れ羽がどういうものか（ただ黒いだけでなく、しっとりとした色である）知っている必要がある。その意味でメタファーは、話し手、聞き手側も含めた発話の文脈から独立して存在するものではない。その文脈には、談話理解の文脈の場合と同じく、メタファーの話し手が聞き手が持っているのと査定するテキスト内情報と、テキスト外情報である発話の状況、発話の意図、文化的背景などの語用論的情報も含まれる。メタファーをテキスト内情報である統語的枠組みの中でのみ論じることが困難なのは、これ故である。もちろん固定化してしまった死喩とかイ

ディオム表現の場合は、この文脈をもはや考慮する必要がない。

メタファーと話し手、聞き手の共有する力との関係は重要である。今までメタファーが世界を切り取るという言い方をしてきたが、実際は、メタファーが世界を切り取るのではなく、話し手が世界を切り取るということができる。言語表現そのものが世界を説明、解釈するのではなく、その言語表現の話し手が、メタファーを使って、その目的をはたすのである。この場合、前述の（8）、（9）の例に見られるように、話し手、聞き手双方による、メタファーによる世界の解釈に差が生じることがある。この意味で、メタファー解釈は、他の多くの言語表現の解釈と同様に話し手、聞き手双方の共同作業の面を持つ。

ある表現がメタファーであるか、字義通りの意味を持つのかを決めるのは、その表現に内在する客観的な意味ではなくて、その表現の話し手と聞き手である。その意味で、メタファーの解釈に必要な文脈には、話し手と聞き手、その両者が共通して持つ、語用論的な知識が含まれていなければならない。

## 5. メタファーとイディオム

メタファーとイディオムは、個々の構成素（単語）の意味の総和が全体の意味を生み出すのではないという意味において共通している。

山梨（1988）によると、一般に、イディオムの慣用的な意味は、語源的には、文脈や状況に依存した比喩的な意味から派生してきており、はじめはその言語の共同体で、その場の特殊な状況の知識にもとづいた創造的な比喩として、しかもその場かぎりの伝達が目的で一時的に意図されていた意味が、その場の状況から独立して、その表現の慣用的な意味として定着していったものである。意味が固定化した場合、その表現全体が、自律的な一つの単位となり、この意味と形式の関係が一对一の関係で成立することになれば、その言語表現の構成素に対し、移動や削除等の統語的な操作を適用することは不可能になる。これに対し、創造的な比喩表現は、その文脈、状況によって字義通りの意味にも比喩的な意味にも解釈

できる。この場合の比喩的な意味の解釈は、その字義通りの意味と、この表現が使われる文脈、状況に依存してはじめて成立する。したがって、形式的にみた場合、この種の比喩表現は、自律的な一つの単位でなく、その構成素にたいし、かなり柔軟な統語操作が適用できることが予想される。

レイコフ (1987) は、かなり多くの場合、イディオムの意味と形式の関係は恣意的なものではなく、動機づけられたものであり、その動機づけはイメージと知識とメタファーをつなぎ合わせたものからなるとしている。

(10) Our team were all tired, but the coach's pep talk was a shot in the arm.

(10) の a shot in the arm はこの文では「元気づけるもの」という意味で使われるイディオム表現だが、最初は字義通りの意味から、比喩的表現として使われるようになり、その意味が固定化してイディオムになった例である。

(11) Our team were all tired, but the coach's pep talk was like a shot in the arm.

(12) The patient got very nervous, but a shot in the arm made him fall fast asleep.

(13) All our team need now is a shot in the arm.

(10), (11), (12), (13) が字義通りの解釈を許すか、イディオムなのかは、山梨 (1988) のいう、創造的な比喩表現と同じく、字義通りの意味と、その表現が含まれる文内の文脈、発話の状況は、話し手、聞き手の共有する文化的知識などを含めた広い意味での文脈に依存する。(10)の場合は、この文全体からわかる状況と、coach's pep talk が注射ではないことは明らかであるという事実から、イディオムと認知される。(11)は直喩だが、隠喩の場合と異なり、直喩の場合は、直喩のマーカ、like, as, as ifなどをとったあとの構成要素は字義通りの解釈が許される。この場合の a shot in the arm は字義通りの意味の「腕への注射」になる。(12) は、a shot in the

arm がメタファー表現でなく字義通りの意味に使われた例である。(13) の場合は、必要とされているものは、字義通りのものなのか、イディオムの意味するものなのかは、曖昧である。

すべてのイディオムがそうだというわけではないが、最初は比喩的表現として派生したものが、その文脈を離れて、固定化した慣用表現となり、イディオムとなると考えられる。イディオムになった場合は、メタファーの持っていたイメージを喚起する力は、まったくではないが、失われている。メタファーが死喩もしくは字義通りの表現に近くなったときにも、最初にメタファーが生まれたときに持っていた世界を新しく切り取る力は失われ、初めに持っていたはずの豊かなイメージが失われている。

その誕生の時は世界に対する新しい認知を生み出したメタファーは、固定化していくと、すでにある世界観の一部に組み込まれ、メタファー表現そのものは、慣用化され、字義通りの意味の一部に組み込まれて、言語使用共同体の成員に了解されるようになる

## 結 び

メタファーが単に言語表現上の問題にとどまらず、話し手が世界を認知し、その独自の視点で世界を解釈して提示しているためのものとすれば、メタファーの産出、理解の研究には話し手、聞き手をも含めた認知という観点を欠かすことはできない。

本論は平成 4. 5 年度の塚本学院教育研究費補助金による成果である。

本中の用例 (1) (2) (3) (6) はレイコフ&ジョンソン (1980) より、(10) は Kumazawa (1993) より採った。

### 註

注 1. J.M.ソスキース (1992)

注 2. レイコフ&ジョンソン (1980) は、I just can't swallow that

claim.という表現は、IDEAS ARE FOOD (考えは食べ物である) という概念メタファー反映したものであるとしているが、このメタファーにより、swallow の意味が中核的意味(プロトタイプ) から拡張されたという主張が導き出される。

注 3. 特に、相反するもの、かけ離れたものを結びつけるメタファーがマニエリスムの文体術で、それにより綺想がうみだされる。ホッケ (1971) によると、隠喩の過度の連鎖や〈対置〉の隠喩の特殊な使用もマニエリスム的であり、メタファー的に語るとするのはマニエリスムの身振り術である。

注 4. Let me pour forth

My tears before thy face whilst I stay here.  
For thy face coins them, and thy stamp they bear.  
And by this mintage they are something worth,  
For thus they be  
Pregnant of thee ;  
Fruits of much grief they are, emblems of more :  
When a tear falls, that thou falls which it bore ;  
So thou and I are nothing then, when on a divers shore.

On a round ball  
A workma that hath copies by, can lay  
An Europe, Afric, and Asia,  
And quickly make that which was no thing, all ;  
So doth each tear  
Which thee doth wear,  
A globe, yea world, by that impression grow,  
Till thy tears mix'd with mine do overflow  
This world : by waters sent from thee, my heaven dissolved so.

O more than moon,  
Draw not up seas to drown me in thy sphere,  
Weep me not dead in thine arms, but forbear  
To teach the sea what it may do to soon ;  
Let not the wind  
Example find  
To do me more harm than it purposeth ;  
Since thou and I sigh one ano ther's breath.  
Whoe'er sighs most is cruelest, and hastes the other's death

#### 参考文献

- 佐伯胖 1986 コンピューターと教育 岩波新書  
グスタフ・ルネ・ホッケ 1971 文学におけるマニエリスム 現代思潮社  
J・M・ソスキース 1992 メタファーと宗教言語 玉川大学出版局  
レイコフ・G, M・ジョンソン 1986 レトリックと人生 大修館書店  
ジョージ・レイコフ 1993 認知意味論 紀伊國屋書店  
マーク・ジョンソン 1991 心のなかの身体 紀伊國屋書店  
Davidson, D 1979 What Metaphors Mean in Sacks, S(ed)(1987)  
Fulghum, R 1986 All I Really Need to Know I learned in Kindergarten  
Lakoff, G 1987 Women, Fire, and Dangerous Things, The University of Chicago Press  
Lakoff, G & M. Johnson 1980 Metaphors We Live By, The University of Chicago Press  
Lakoff, G & M. Turner 1989 More than cool Reason, The University of Chicago Press  
Sacks, S(ed) 1979 On Metaphor, The University of Chicago Press  
Schulz, Charles. M 1981 Dr. Beagle and Mr. Hyde, Holt, Rinehart and Winston